

# 大学生における「色彩コラージュ法」の特徴

牧 田 浩 一

# 大学生における「色彩コラージュ法」の特徴

牧 田 浩 一

Koichi MAKITA

## 目次

- I はじめに
- II 目的
- III 対象と方法
- IV 結果
- V 考察
- VI おわりに

## 〔Abstract〕

### Characteristics of University Students' "Color Collage Method"

The subjects of this research were 53 university students ranging from freshmen to seniors (14 men, 39 women, average age 19.4 years). The purpose of this research was to clarify trends and expressive characteristics in color collage works by the students. The survey took place between June and September in a psychology laboratory at the university and consisted of a formal and content analysis of their works. The results were as follows. Both men and women were more likely to use the paper in a horizontal orientation. They were also more likely to paste layers over each other than not. Most also used "uncolored space." In most cases, color saturation was high. Hues were most often neutral. Among shapes of cutouts used, the circle was the most common. Discrepancy between men and women was seen in the fact that more men than women chose to orient the paper vertically. The above results were then examined.

## I はじめに

コラージュ療法は、1987年に森谷寛之が「心理療法におけるコラージュ（切り貼り遊び）の利用」を東海精神神経学会に発表したことに始まる。その後、様々な臨床現場で利用され、様々な年齢層を対象に基礎研究も進められている。今日では、コラージュ療法は、心理療法としての効果が認められるとともに、芸術療法の一つとして認知されている。

森谷（2012）によると、コラージュ療法は、「持ち運べる箱庭」というコンセプトのもと発想された。また、従来の芸術療法にはなかった「レディ・メイドの利用」すなわち、既製品を利用することで多様な素材の「組み合わせ」ができるようになった。そのため、心の

表現の幅が広がり、複雑かつ詳細なオリジナルティの表出が可能になったと言われている。

コラージュ療法の技法に関しても発展が認められる。山根・田中（2003）は、学校現場で生徒理解の手がかりを得ることを目的として、「色彩コラージュ法」を考案した。色彩コラージュ法は、コラージュ療法と同様に「レディ・メイドの利用」（森谷、2012）という特徴を有し、色、切片の形、貼り方の3つの要素を組み合わせによって成り立つ。山根・田中（2003）は、色彩コラージュ法の有用性を確かめるために、中学生172名を対象に調査を行った。調査は、対象の一人ひとりに予め決められた色、形の色紙と糊、八つ切りの白画用紙を用意し、それらを用い30分間切り貼りの作業を行わせるというものだった。

キーワード：色彩コラージュ法、大学生、コラージュ療法

Key words：Color Collage Method, College Students, Collage Therapy

その調査の結果から、中学生の色彩コラージュ法の一般的な傾向と特異な表現が認識され、色彩コラージュ法の表現の多様性が確認された。

矢野・小坂（2008）は、色彩コラージュ法をもとにした図画工作科の授業を実施し、授業の効果が子どもに与える心理的効果について検討している。小学校4年生の2学級を対象に、各4回の授業を実施したところ、子どもの状態不安が有意に軽減される結果を得ている。

佐藤（2010）は、大学生や大学院生などを対象に、27色の折り紙セットの中から5色を選択させたものを直径約25cmの円形白画用紙に貼るという方法で色彩コラージュ法の表現分類を試みている。その結果、色彩コラージュ法が多様な表現の可能性が高い技法であると述べている。しかし、それらの色彩コラージュを数量化したデータは示されていない。

以上、先行研究を概観すると、筆者の調べた限り大学生の色彩コラージュ法の基礎的データを示す先行研究は見当たらなかった。佐藤（2011）が大学生に色彩コラージュ法を実施しているが、公刊されていない。また、大学生の色彩コラージュの傾向や特徴を明らかにすることによって、大学生のメンタルヘルスの向上に寄与できるのではないかと考えた。したがって、大学生の色彩コラージュ法の基礎的データを示すことが必要である。本研究では、大学生の色彩コラージュ法の基礎的データを示すとともに、大学生の色彩コラージュ法の特徴について若干の考察を行う。

## Ⅱ 目 的

大学生の「色彩コラージュ」作品の傾向や表現特徴を明らかにすることを目的とする。

## Ⅲ 対象と方法

### 1. 対象

対象は、地方の四年制私立大学学生53名（男性14名、女性39名）である（表1）。大学の講義の時間にボランティア参加者を募り、後日電子メールで連絡をしたうえで、参加者の都合のよい時間に実験室に来てもらった。個別形式と2～15名程度のグループ形式を併用し実施した。グループ形式の実施では、隣の人とのスペースは十分とることを配慮し、おしゃべりは控えるよう教示を加えた。どちらの場合にも、参加は任意であることや途中でやめても何ら不利益がないことを文書と口頭で伝え、了承を得た。なお、研究参加の同意書にサインを得ている。

表1 対象者の内訳

	大 学 1 年 生	大 学 2 年 生	大 学 3 年 生	大 学 4 年 生	計(人)
男性	4	5	2	3	14
女性	11	13	4	11	39
計	15	18	6	14	53

### 2. 方法

- (1) 実施方法：20色の折り紙（赤・オレンジ・みかん・肌・クリーム・黄・白・薄ピンク・ピンク・薄青・みず・薄緑・黄緑・緑・茶・ふじ・灰・コバルト・青・黒）をそれぞれ①丸，②三角，③四角，それぞれの形に①大，②中，③小の各大きさのもの（丸（大：半径7センチメートル，中：同4.5センチメートル，小：同2.5センチメートル），三角（大：一辺15センチメートル，中：同9センチメートル，小：同5センチメートル），四角（大：一辺15センチメートル，中：同10センチメートル，小：同5センチメートル）を用意する。折り紙の材質感は統一し，切片数は同じ色が複数あるため，切片数は200枚程度であった。色紙が不足した場合，途中で補充することとした。台

紙は、八つ切り画用紙（台紙の色は白）である。一人分ずつ箱の中に色紙、糊やハサミを入れたものを用意した。

- (2) 手続き：作品制作時間を最大30分とした。作品の制作を終えたとき、作品の天地、振り返りカードの記入をさせた。振り返りカードには、「色彩コラージュを行ってみての感想や、自分の作品の意味（使った色や形、貼った場所などに意味があるか）、今の気分などを自由にお書きください」と記載し、自由記述とした。
- (3) 調査期間：2011年6月～9月に調査を実施した。
- (4) 教示の仕方：教示は次の通り行った。「色折り紙の色をよくみて今の気持ちを色や形で自由に画用紙に貼り付けて表現してください。なお、折り紙はハサミで切っても、手でちぎって貼り付けても構いません。用紙の向きも縦でも横でも構いません。また、折り紙は重なっても画用紙からはみ出しても構いません。制作時間は、30分です。制作が終わりましたら作品の天地と振り返りカードを記入してもらいます」と教示した。
- (5) 結果の整理：結果の整理は、大学生1名とコラージュ療法の経験のある臨床心理士1名の計2名で行った。

## IV 結果

色彩コラージュ作品の分析の項目として、本方法の考案者である山根・田中（2003）に倣い、形式分析と内容分析の2つの分析を行った。形式分析では、①用紙の使い方、②はみ出しの有無、③重ね貼りの有無、④余白の有無、⑤無彩色の有無、⑥主な色、⑦色数、⑧色の明度、⑨色の彩度、⑩色の色相、⑪切片数、⑫切片の形の項目について分析を行った。内容分析では、①具体表現、②モノクロ表現、③タイル張り表現、④マスク表現、⑤折り紙

表現、⑥立体表現、⑦裏貼り表現、⑧マンダラ表現、⑨対称表現をそれぞれ集計した。

### 1. 形式分析

#### (1) 用紙の使い方

用紙は「縦」「横」を自由に使用してもらった。その結果、用紙を「横」に使用したものは91%（48人）、「縦」に使用した作品は9%（5人）であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果、用紙を「横」に使用したものが有意に多かった（ $\chi^2=34.887$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ ）。つぎに、学年別と男女別に $\chi^2$ 検定を行った結果、学年別ではクロス集計の分布に有意な偏りが認められなかった（表2）。男女別では、フィッシャーの直接確率を求めたところ、 $p=.014$ で5%水準で有意な差が見られた（表3）。男子が「縦」に使用したものが多く、女子が「横」に使用したものが多かった。

表2 用紙の使い方（学年別）

	大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
横づかい 度数	15	16	4	13	48
調整済み残差	1.5	-0.3	-2.1	0.3	
縦づかい 度数	0	2	2	1	5
調整済み残差	-1.5	0.3	2.1	-0.3	
計	15	18	6	14	53

表3 用紙の使い方（男女別）

	男性	女性	計(人)
横づかい 度数	10	38	48
調整済み残差	*-2.9	2.9*	
縦づかい 度数	4	1	5
調整済み残差	2.9*	*-2.9	
計	14	39	53

( $\chi^2=34.887$ ,  $df=1$ , \*  $p<.05$ )

#### (2) はみ出しの有無

用紙から切片が少しでもはみ出しているものを「はみ出しの有り」として集計した。その結果、「はみ出し有り」は58%（31人）、「はみ出しの無し」は42%（22人）であった。学年別と男女別で $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な差が見られなかった（表4、表5）。

表4 はみ出しの有無(学年別)

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
有り	度数	9	9	3	10	31
	調整済み残差	0.1	-0.9	-0.4	1.1	
無し	度数	6	9	3	4	22
	調整済み残差	-0.1	0.9	0.4	-1.1	
計		15	18	6	14	53

表5 はみ出しの有無(男女別)

		男性	女性	計(人)
有り	度数	9	22	31
	調整済み残差	0.5	-0.5	
無し	度数	5	17	22
	調整済み残差	-0.5	0.5	
計		14	39	53

## (3) 重ね貼りの有無

用紙の上で切片が少しでも重なっているものを「重ね貼りの有り」と集計した。その結果、「重ね貼りの有り」は98% (52人), 「重ね貼りの無し」2% (1人)であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果, 「重ね貼りの有り」のものが有意に多かった ( $\chi^2 = 49.075$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ )。学年別と男女別では, 有意な差が見られなかった (表6, 表7)。

表6 重ね貼りの有無(学年別)

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
有り	度数	15	17	6	14	52
	調整済み残差	0.6	-1.4	0.4	0.6	
無し	度数	0	1	0	0	1
	調整済み残差	-0.6	1.4	-0.4	-0.6	
計		15	18	6	14	53

表7 重ね貼りの有無(男女別)

		男性	女性	計(人)
有り	度数	14	38	52
	調整済み残差	0.6	-0.6	
無し	度数	0	1	1
	調整済み残差	-0.6	0.6	
計		14	39	53

## (4) 余白の有無

用紙の上に余白なく切片を貼り付けてあるものを「余白の無し」として集計した。その結果, 「余白無し」が0% (0人), 「余白の有り」が100% (53人)であった

(表8, 表9)。「余白無し」が0% (0人)であったため, 検定は行わなかった。

表8 余白の有無(学年別)

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
有り	度数	15	18	6	14	53
無し	度数	0	0	0	0	0
計		15	18	6	14	53

表9 余白の有無(男女別)

		男性	女性	計(人)
有り	度数	14	39	53
無し	度数	0	0	0
計		14	39	53

## (5) 無彩色の有無

無彩色(白色・黒色・灰色)が, 用紙に貼られているものを「無彩色有り」として集計した。その結果, 「無彩色有り」は77% (41人), 「無彩色無し」は23% (12人)であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果, 「無彩色有り」のものが有意に多かった ( $\chi^2 = 15.868$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ )。学年別と男女別では, 有意な差が見られなかった (表10, 表11)。

表10 無彩色の有無(学年別)

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
有り	度数	10	15	4	12	41
	調整済み残差	-1.2	0.7	-0.7	0.9	
無し	度数	5	3	2	2	12
	調整済み残差	1.2	-0.7	0.7	-0.9	
計		15	18	6	14	53

表11 無彩色の有無(男女別)

		男性	女性	計(人)
有り	度数	12	29	41
	調整済み残差	0.9	-0.9	
無し	度数	2	10	12
	調整済み残差	-0.9	0.9	
計		14	39	53

## (6) 主な色

20色の折り紙(赤・オレンジ・みかん・肌・クリーム・黄・白・薄ピンク・ピンク・薄青・みず・薄緑・黄緑・緑・茶・ふじ・灰・コバルト・青・黒)のうち, 1つの作

品の中で中心的に使われた色（主調色）を「主な色」として集計した。その際、同じ色相で明度の少し違う色は、合わせて一つの色として集計した（14色（赤，オレンジ＜オレンジとみかん＞，肌，黄＜クリームと黄＞，白，ピンク＜薄ピンクとピンク＞，みず＜薄青とみず＞，青＜コバルトと青＞，緑＜薄緑と緑＞，黄緑，茶，ふじ，灰，黒）。

全体の集計結果を図1に示す。赤19%（10人），青17%（9人），オレンジ13%（7人），黒13%（7人）の順であった。

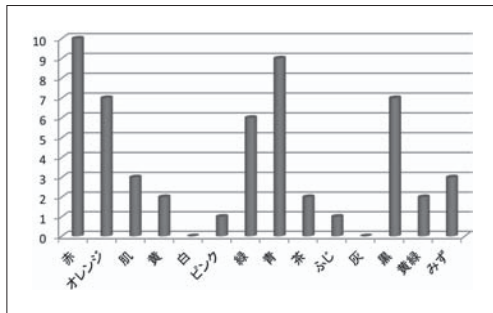


図1 主に使われた色と人数（人）

学年別の集計結果を図2に示す。1年生がオレンジ20%（3人），青20%（3人），緑13%（2人），黒13%（2人），黄緑7%（1人），2年生が赤22%（4人），オレンジ17%（3人），みず17%（3人），3年生が黒50%（3人），赤33%（2人），青17%（1人），4年生が赤20%（3人），緑20%（3人），青20%（3人），肌14%（2人），オレンジ7%（1人），ふじ7%（1人），黒7%（1人）の順であった。

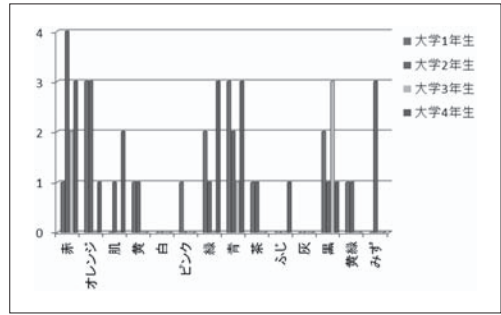


図2 主に使われた色と人数（学年別）

男女別の集計結果を図3に示す。男性は赤20%（3人），オレンジ20%（3人），黒20%（3人），青14%（2人），緑7%（1人），茶7%（1人），みず7%（1人）であった。女性は赤13%（7人），青13%（7人），緑13%（5人），オレンジ10%（4人），黒10%（4人）の順であった。

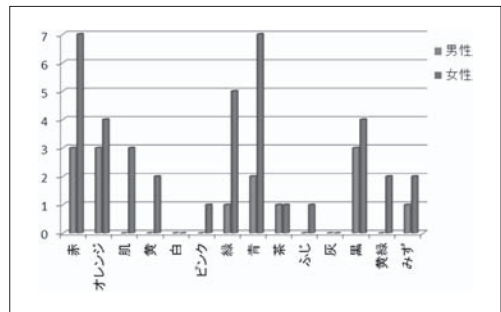


図3 主に使われた色と人数（男女別）

#### (7) 色数

同じ色相で明度の少し違う色は、合わせて一つの色として集計した。したがって、14色のうち、1つの作品の中で使われた色数を集計した。その結果、平均色数は、9.36色であった。学年別と男女別で分散分析を行ったところ、いずれも有意な差が見られなかった（表12，表13）。

表12 色数の平均値, SD と F 値 (学年別)

学年	平均値	SD	F 値
大学 1 年生	8.6	3.16	1.25
大学 2 年生	9.61	2.48	
大学 3 年生	8.5	1.87	
大学 4 年生	10.21	2.12	
計	9.36	2.57	

表13 色数の平均値, SD と F 値 (男女別)

性別	平均値	SD	F 値
男性	8.5	2.53	2.17
女性	9.67	2.55	
計	9.36	2.57	

## (8) 色の明度

切片の20色を黄などの明るい色, 緑などの中間の色, 黒などの暗い色の3つに分類し, どの色を主に用いたかを判定した。その結果, 「明るい」は45% (24人), 「中間」は30% (16人), 「暗い」は25% (13人) であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果, 有意な差が見られなかった (表14, 表15)。

表14 色の明度 (学年別)

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
明るい	度数	6	10	2	6	24
	調整済み残差	-0.5	1.1	-0.6	-0.2	
中間	度数	4	8	0	4	16
	調整済み残差	-0.4	1.6	-1.7	-0.2	
暗い	度数	5	0	4	4	13
	調整済み残差	0.9	-3.0*	2.5*	0.4	
計		15	18	6	14	53

$$(\chi^2 = 13.142 \quad df = 6 * \quad p < .05)$$

表15 色の明度 (男女別)

		男性	女性	計(人)
明るい	度数	4	20	24
	調整済み残差	-1.5	1.5	
中間	度数	5	11	16
	調整済み残差	0.5	-0.5	
暗い	度数	5	8	13
	調整済み残差	1.1	-1.1	
計		6	14	53

## (9) 色の彩度

20色を白や灰の混ざった淡い色を「淡い」とし, 黄や緑などの中間の色を「中間」, 純色のはっきりした濃い色を「濃い」とし

て分類し, どの彩度の色を主に用いたかを集計した。その結果, 「濃い」は53% (28人), 「中間」は42% (22人), 「淡い」は6% (3人) であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果, 「濃い」が有意に多かった ( $\chi^2 = 19.283$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ )。学年別では有意な差が見られなかった (表16)。男女別では, 女性の「中間」と男性の「濃い」が有意に多く, 女性の「濃い」と男性の「中間」が有意に少なかった (表17)。

表16 色の彩度 (学年別)

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
淡い	度数	0	1	0	2	3
	調整済み残差	-1.1	0.0	-0.6	1.6	
中間	度数	7	9	2	4	22
	調整済み残差	0.5	0.9	-0.4	-1.1	
濃い	度数	8	8	4	8	28
	調整済み残差	0.0	-0.9	0.7	0.4	
計		15	18	6	14	53

表17 色の彩度 (男女別)

		男性	女性	計(人)
淡い	度数	0	3	3
	調整済み残差	-1.1	1.1	
中間	度数	2	20	22
	調整済み残差	*-2.4	*2.4	
濃い	度数	12	16	28
	調整済み残差	1.1	-1.1	
計		14	39	53

$$(\chi^2 = 8.368 \quad df = 2 * \quad p < .05)$$

## (10) 色の色相

20色を黄, 赤系の「暖色」, 青系を「寒色」, 緑系または「暖色」と「寒色」も同じような分量で使われたものは「中間色」とし集計した。その結果, 「暖色」は40% (21人), 「中間色」は51% (27人), 「寒色」は9% (5人) であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果, 「中間色」が有意に多かった ( $\chi^2 = 14.642$ ,  $df = 2$ ,  $p < .01$ )。学年別と男女別では, 有意な差が見られなかった (表18, 表19)。



表18 色の色相（学年別）

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
暖色	度数	5	8	4	4	21
	調整済み残差	-0.6	0.5	1.4	-1.0	
中間色	度数	9	9	2	7	27
	調整済み残差	0.8	-0.1	-0.9	-0.1	
寒色	度数	1	1	0	3	5
	調整済み残差	-0.4	-0.7	-0.8	1.8	
計		15	18	6	14	53

表19 色の色相（男女別）

		男性	女性	計(人)
暖色	度数	5	16	21
	調整済み残差	-0.3	0.3	
中間色	度数	6	21	27
	調整済み残差	-0.7	0.7	
寒色	度数	3	2	5
	調整済み残差	1.8	-1.8	
計		14	39	53

#### (11) 切片数

1つの作品の中で使われた切片の数を集計した。切片数の平均と標準偏差を算出したところ全体の平均切片数は、38.26枚であった。最小数は10枚で、最大数は118枚であった。それらを学年別と男女別で分散分析したところ、いずれにおいても有意な差が見られなかった（表20、表21）。

表20 切片数の平均値、SD と F 値（学年別）

学年	平均値	SD	F 値
大学 1 年生	41.07	18.23	0.89
大学 2 年生	42.11	25.89	
大学 3 年生	26	25.38	
大学 4 年生	35.57	21.88	
計	38.26	22.74	

表21 切片数の平均値、SD と F 値（男女別）

性別	平均値	SD	F 値
男性	44.29	28.89	1.34
女性	36.1	20.09	
計	38.26	22.74	

#### (12) 切片の形

「丸」、「四角」、「三角」の切片の形のうち、どれを主に使っているかを集計した。元の形を変形したもの、丸、四角、三角を同じような分量で使っており、分類が判別

しにくいものを「不定形」とした。その結果、「丸」は47%（25人）、「不定形」は25%（13人）、「三角」は15%（8人）、「四角」は13%（7人）であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果、「丸」を主に使ったものが有意に多かった（ $\chi^2=15.453$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ ）。学年別と男女別では、有意な差が見られなかった（表22、表23）。

表22 切片の形（学年別）

		大 学 1 年生	大 学 2 年生	大 学 3 年生	大 学 4 年生	計(人)
丸	度数	6	12	1	6	25
	調整済み残差	-0.7	2.0	-1.6	-0.4	
四角	度数	2	1	2	2	7
	調整済み残差	0	-1.2	1.5	0.1	
三角	度数	2	3	0	3	8
	調整済み残差	-0.2	0.2	-1.1	0.8	
不定形	度数	5	2	3	3	13
	調整済み残差	0.9	-1.6	1.5	-0.3	
計		15	18	6	14	53

表23 切片の形（男女別）

		男性	女性	計(人)
丸	度数	3	22	25
	調整済み残差	-2.2	2.2	
四角	度数	4	3	7
	調整済み残差	2.0	-2.0	
三角	度数	3	5	8
	調整済み残差	0.8	-0.8	
不定形	度数	4	9	13
	調整済み残差	0.4	-0.4	
計		14	39	53

## 2. 内容分析

### (1) 具体表現

具体表現とは、「与えられた色切片を使って、具体的な形や文字を作った作品（山根・田中，2003）」である。

具体表現をした作品は、57%（30人）であった。その内容としては、「太陽、花、木などの自然物を表現したもの」が36%（15人）、「ハート、星などのマークを表現したもの」が21%（9人）、「風景を表現したもの」が12%（5人）、「食べ物や表現したもの」が7%（3人）、「建物や表現したもの」が5%（2人）、「道具を表現したもの」が5%（2人）、「道具を表現したもの」が5%（2人）。



の」が5% (2人), 「文字を表現したもの」が2% (1人), 「オリジナルキャラクターを表現したもの」が2% (1人) であった。

(2) モノクロ表現

モノクロ表現とは, 「無彩色 (白・黒・灰) のみを使った作品 (山根・田中, 2003)」である。

モノクロ表現をしたものは, いなかった。

(3) タイル張り表現

タイル張り表現とは, 「画面一面に隙間なく色紙を貼った作品 (山根・田中, 2003)」である。

タイル張り表現をしたものは, 6% (3人) であった。

(4) マスク表現

マスク表現とは, 「色彩コラージュをした上に違う色で表面を覆うように色紙を貼った作品 (山根・田中, 2003)」である。

マスク表現をしたものは, 4% (2人) であった。

(5) 折り紙表現

折り紙表現とは, 「色紙を使って, 折り紙をしたものを貼った作品 (山根・田中, 2003)」である。

折り紙表現をしたものは, 4% (2人) であった。

(6) 立体表現

立体表現とは, 「立体的な表現をした作品 (山根・田中, 2003)」である。

立体表現をしたものは, 6% (3人) であった。

(7) 裏貼り表現

裏貼り表現とは, 「色切片を裏向きに貼り付けた作品 (山根・田中, 2003)」である。

裏貼り表現をしたものは, 6% (3人) であった。

(8) マンダラ表現

マンダラ表現とは, 「画面の中心に向かって方向性のあるような貼り方をしたマンダラ模様のような作品 (山根・田中, 2003)」

である。

マンダラ表現をしたものは, 2% (1人) であった。

(9) 対称表現

対称表現とは, 「画面の中に対称形のある作品 (山根・田中, 2003)」である。

対称表現をしたものは, 6% (3人) であった。

(10) 色彩コラージュ法の感想

色彩コラージュの感想の一例を表24に示す。その結果, ほとんどの大学生は「やってみると意外に楽しかった」「熱中してできた」「達成感があった」などのポジティブな感想を記していた。感想の一部には, 「苦手。疲れた」というネガティブな感想も見られた。

## V 考 察

鶴田 (1994) (1995) (2001) は, 「従来, 大学生期はひとまとまりの時期として扱われてきたが, 学生相談の実践現場において, 入学直後と4年生とでは心理的特徴が異なる」と述べている。

入学期 (入学後1年間) では「移行に伴う問題」「入学前から抱えてきた問題」の内容が多く, その時期の心理学的特徴は「自由の中での自己決定」「学生生活, ルール, アルバイト, 学習やサークル活動の進め方」「高揚と落ち込み」という。中間期 (2年生と3年生, 留年期間を含む) では「無気力, スランプ, 生きがいや対人関係をめぐる問題」という内容が多く, その時期の心理学的特徴は「あいまいさの中での深まり」「親密な横関係」という。卒業期 (卒業前1年間) には「卒業を前に未解決の問題に取り組む」内容が多く, その時期の心理学的特徴は「卒業論文」「将来への準備」という (鶴田, 2001)。

大学生の時期は, 心理的にも社会的にも子どもから大人へと成長する時期として, ライ

表24 色彩コラージュの感想（抜粋）

折り紙を貼り付けるのは、小学生以来の作業だったので、最初は戸惑いを感じた。やってみると意外と楽しかった。作品のイメージ：ピンクなどの女性らしい色を好むようになってきたけど、昔好きだった水色も忘れないようにした。右下は様々なものが入り混じった中に、明るい希望の光が見えるようにと願いを込めて（貼った）。なんとなくで貼った場所もあるかも。

切り貼りする作業は久しぶりで楽しかったです。魚が好きだから、たくさん魚を作りました。一番大きな魚を作るときに使った折り紙の色が一番好きです。なぜか春っぽい作品になったので、あとで秋っぽいものを混ぜました。楽しかったです。

作品に特に意味はなく、色合いが良くなるように色を配置したつもりです。切り貼りを久々にしたので、楽しかったです。

具象的なものを作りたいとは思わなかった。丸と三角が、自己の中で対立と感じる。個人的には、解釈に興味がある。

とりあえず無心でやったらこうなっていた。なんとなく、黒とか赤とかを手にとって。上から一つの色で塗りつぶしたくなって、無心で貼っていました。今の気分としては、とくに良いも悪いもないけど、とりあえず空白の部分を塗りつぶしたかったです。

楽しかったです。旅行に行きたい気分です。

楽しかったです。太陽と星が好きなので、それをイメージしました。あとは、好きな色をいっぱい使いました。

なんか今日暖かいし、アルバイトも休みで、うれしい気分だから、黄色やオレンジなどの明るい色を多めに貼ってみました。

意味はありません。気分が貼りたいものを心のままに貼りました。今の気分は平常どおりです。

この年になって図工をやるとは思っていなかったの、驚いた。正直この分野は苦手。疲れた。

雪だるまとか花をイメージして貼った。場所は真ん中に貼りました。使った色には意味はありません。

なんかとっても楽しくできました。作品は、ただサボテンを作りたいくて、なんとなく作ってはじに貼り、本当は海とか川をやりたいかったが、青系の折り紙がそんなものだったので、ただ池のようにし、魚を入れ、その周りが緑でいっぱいにして、さみしいから花をおいて、（切った折り紙が）キリンの顔のようになったから、キリンを貼ってみた。小さいころに戻った気分で、本当にとても楽しくできました。もっとやっていたいと思いました。

主に丸い形を使った。イメージとしては初夏って感じ。アジサイとアサガオと虹と太陽と家を作った。青系が好きなので、アジサイをイメージしたものを作ったら最終的にはこう（作品のように）になった。やっているうちにどんどん楽しくなって、幼稚園の頃に貼った気分になった。

自分の好きな色、形をただひたすら貼りました。なんとなく明るい気分なので、自然と明るい色使いになりました。楽しかったです。

無心で行いました。考え事や悩み事を忘れて、ただ好きな色などをどう組み合わせようかと楽しんでました。特に意味はありません。ただ好きな色を使いました。まだ途中だったので、もう少しやりたかったです。

小さいころに戻ったみたいで楽しかったです。イメージとしては、個人的に明るい色が好きなので、それらを使って太陽のようなものが表現したいと思って作成しました。放射線状に見えるように貼っていったのも、太陽を表現できたらいいと思ったからです。

結構熱中しながらできました。作品の意味はあまりなく、貼りたい場所、形を作って貼りました。今の気分は眠たいけど、心は晴れ晴れしています。

はじめてやったけど、配色を考えたり、自分の中のテーマを考えたりしながらやるのは楽しかったです。作品は、太陽の光が反射してキラキラしているイメージです。

カラフルにしたいくて、いろいろな色をなるべくかぶらないようにしながら貼りました。作品に意味はないです。使った色は明るい色でかわいと思う色を使いました。形も丸、三角、四角の全部を使ってちりばめた感じにしました。もう少し時間があつたら、もっといろんな色を、いろんな大きさを、画用紙いっぱいにしてと思いました。

集中しながら作業したので、とても楽しかった。色は、冷たい色と暖かい色で少しずつ変化していくように使った。今の気分は、やり終わった達成感みたいなものがあってとてもすっきりしている。

フサイクルの節目であるといえる。本研究では、そのような心理社会的発達過程にある大学生の色彩コラージュ法には、入学期と卒業期の学生の間には、異なる特徴がみられるのではないかと予測し調査を行ったが、学年差は見られなかった。

山根・田中（2003）は、中学生を対象に「色彩コラージュ法」を実施しており、そこで、形式分析と内容分析の2つの分析法を用いている。形式分析では、①用紙の使い方、②はみ出しの有無、③重ね貼りの有無、④余白の有無、⑤無彩色の有無、⑥主な色、⑦色数、⑧色の明度、⑨色の彩度、⑩色の色相、⑪切片数、⑫切片の形の項目、内容分析では、①具体表現、②モノクロ表現、③タイル張り表現、④マスク表現、⑤折り紙表現、⑥立体表現、⑦裏貼り表現、⑧マンダラ表現、⑨対称表現としている。中学生では、学年差よりもむしろ男女差の方が表れやすいという。

本研究では、山根・田中（2003）の形式分析と内容分析をもとに分析を行った。その結

果、大学生の色彩コラージュにおいて、男女ともに用紙を「横」に使用したものが多く、用紙を「縦」に使用したものは女子より男子に多かった。「重ね貼り有り」のものが多かった。「無彩色有り」のものが多かった。「色の彩度」は、「濃い」ものが多かった。「色の色相」は、「中間色」が多かった。「切片の形」は、「丸」を主に使用したものが多かった。

山根・田中（2003）の中学生を対象に行った調査の結果と今回の大学生を対象に行った色彩コラージュ法を比較し、大学生の色彩コラージュの形式的特徴について、若干の考察を行いたい。

用紙の使い方について、中学生では「93.6%（161人）が「横」に、6.4%（11人）が「縦」に使用し、横に使用したものが多かった」（山根・田中、2003）という。大学生では、用紙を「横」に使用したものは48人（91%）、「縦」に使用した作品は5人（9%）であった。大学生の方が、若干「縦」の使用が多くなっている。色彩コラージュ法の実施のとき、

検査者が「用紙の向きは自由」と教示しつつも、「横」にして被検査者（大学生）に渡している過程を鑑みると、「縦」づかいに何らかの意思が感じられる。また、大学生という時期における発達課題に「同一性対同一性拡散」(Erickson, 1994)がある。この時期は、以前にはほとんどなかった社会的な自己決定や自己選択を迫られる場面が急増する。それまでそうした経験をしてこなかった大学生にとってそれらの場面にたびたび遭遇することは、大きな悩みとなる。大学生生活を送る中で自己決定や自己選択を繰り返し行うことで、そうした場面での対処法が身につく。前述のことを考慮すると、用紙を「縦」に使用した大学生から自分らしさや独自性を発揮しようとする心理が現れたと考えられる。大学生の女性よりも男性の方が「縦」が多かったことも同様の理由だと考えた。

今回の調査では、「重ね貼り有り」のものが多かった。中学生では、「重ね貼り有りのものが93.0% (160人)、重ね貼り無しが7.0% (12人)」(山根・田中, 2003)という。大学生では、重ね貼りをしたものが98%であり、中学生より若干ではあるが、重ね貼りをしたものが多かったと言える。このことから大学生は、コラージュ法という二次元空間の上に重ね貼りをすることで三次元空間的表現を好んだと推測される。

今回の調査では、「無彩色有り」のものが多かった。中学生では、「無彩色有りが73.8% (127人)、無彩色無しが26.2% (45人)」(山根・田中, 2003)という。大学生も中学生とほぼ同じ傾向が現れた。大学生と中学生では、「無彩色の有無」の点では、違いがないことになる。

今回の調査では、「色の彩度」は、「濃い」ものが多かった。中学生では、「濃い色が有意に多く、淡い色は女子に多く、濃い色が男子に多かった」(山根・田中, 2003)という。大学生と中学生では、ほぼ同じ傾向が現れた。

両者の「色の彩度」の点では、違いがないことになる。

今回の調査では、「色の色相」は、「中間色」が多かった。中学生では、「中学1年生に、中間色や寒色が多かった」(山根・田中, 2003)という。大学生と中学生では、「中間色」が多かった点は共通するが、中学生の、「寒色」が多かった点については、大学生とは異なる傾向が現れた。大学生に「中間色」が多かったことは、「暖色」や「寒色」という極端な色相ではないバランス感覚に意識が向かっていると考えられる。大学生の人間関係など社会的関係の広がりということが、色相に現れたのかもしれない。

今回の調査では、「切片の形」は、「丸」を主に使用したものが多かった。中学生では、「四角を使ったものが多く」「丸は、女子に多く、四角が男子に多かった」(山根・田中, 2003)という。丸の切片の形の意味は、多様であるが、三角や四角のように「カド」がない、と解釈すると「円満さ」や「協調性」の意味として理解することもできる。中学生よりも遥かに自由な学校生活を送っていると思われる大学生が、「円満さ」や「協調性」を色彩コラージュに表現したと考えることができる。

また、本研究では、学年別の差がいずれの場合も認められなかった。山根・田中(2003)の中学生の結果では、1年生で「はみ出し有り」が「はみ出し無し」より多く、2年生では、反対に「はみ出し無し」が「はみ出し有り」より多いことや「色の明度」において3年生に「暗い」が多く、2年生に「暗い」が少ない。「色の色相」では、1年生で「寒色」が多く、「中間」が少ないという学年差が見られている。今回の調査で学年差がなかったことについて、2つの理由が考えられる。一つは、大学生の色彩コラージュ法には学年差が見られないこと、もう一つは、対象者数が十分でなかったことである。後者の理由なら

ば、更に対象者を増やすことで学年差が出る可能性が考えられるので、より多くのデータ収集を検討したい。

## VI おわりに

本研究では、大学生の色彩コラージュ法の特徴を調べた。色彩コラージュ作品の形式分析と内容分析を行い、大学生の色彩コラージュの特徴に若干の考察を加えた。

色彩コラージュ法は、コラージュ療法の色彩面をピックアップしたもので、決められた形（3タイプ）、大きさ（3タイプ）と色（20色）の計180の切片を組み合わせて作品を作る方法である。この方法は、形式的な性質をシンプルにし、「色」と「形」を限定することでより複雑で細かい表現ができるのが特徴だと感じられた。更に、色彩コラージュ法は、コラージュ療法の特徴である「レディ・メイドの利用」（森谷，2012）によって、気軽に取り組んでもらえる方法だと思われた。

更に、「やってみると意外に楽しかった」「熱中してできた」「達成感があった」など大学生の感想にあるように色彩コラージュ法は、実際に行くと楽しくでき、出来上がった作品は、美的感覚を満足させる。そのことは、今後の臨床現場において色彩コラージュ法とカウンセリングを併用することで、それらの相乗効果が期待できるのではないだろうか。

また、今後の課題として、被験者の数を増やすことや性別の偏りをなくすこと、結果の整理の方法にまだ検討の余地がある。そして、折り紙の切片の持つ組み合わせが複雑であるため、更なるデータの蓄積が必要であると思われる。色彩コラージュ法の今後の研究発展が期待される。

### 〔付 記〕

本研究は、筆者が指導教員として佐藤真衣氏が2011年度北星学園大学福祉心理学科卒業

論文「大学生における『色彩コラージュ法』の実施」とし提出されたものを再検討し、まとめたものである。本研究の学術的資料価値を理解し、公表することに同意してくれた佐藤氏に記して感謝申し上げる。

### 〔引用文献〕

- Erikson, E. H. (1994) Identity and the Life Cycle. W W Norton & Co Inc ; Reissue. (西平直ら (訳) (2011) アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房)
- 森谷寛之 (1987) 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用. 第126回東海精神神経学会.
- 森谷寛之 (1988) 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用, 精神神経学雑誌, 90(5), 450.
- 森谷寛之 (1990) 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用—砂遊び・箱庭・コラージュ—. 芸術療法, 21(1), 27-37.
- 森谷寛之 (2012) コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで. 金剛出版.
- 鶴田和美 (1994) 大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味: 比較的健康な自発来談学生についての検討. 心理臨床学研究, 12(1), 97-108.
- 鶴田和美 (1995) 学生相談における時間の意味. 心理臨床学研究, 12(4), 297-307.
- 鶴田和美 (2001) 青年期: アイデンティティの危機. 講座 臨床心理学〈5〉発達臨床心理学. 下山晴彦, 丹野義彦 (編著) (2001) 東京大学出版会.
- 佐藤仁美 (2010) 色彩コラージュにおける表現空間: 構成・構造の視点から. 放送大学研究年報, 28, 21-29.
- 佐藤真衣 大学生における「色彩コラージュ法」の実施. 2011年度北星学園大学福祉心理学科卒業論文, 未公開.
- 山根和子・田中雄三 (2003) 「色彩コラージュ法」開発の試み. 遊戯療法学研究, 2(1), 60-70.
- 矢野博幸・小坂浩嗣 (2008) 図画工作科の授業が児童に与える心理的効果: 色彩コラージュを用いて. 鳴門生徒指導研究, 18, 32-44.

